「よく聞かれること」

「お父さんかお母さん、どっちが向こうの人？」「英語話せる？」「君ってハーフ？」etc.

私はこのような質問を小さい頃から何度もされ、そのたびに同じことを繰り返し答えてきました。小さい頃はそれほどイヤではなかったのですが、小学校の高学年頃から中学生・高校生の頃はこの質問をされるのがとってもイヤでした。「どうしてそんなこと答えないといけないのか」とずっと思っていました。この質問をする人は聞く前に考えたことがあるのでしょうか、私が何回同じ質問に答えてきたかということを。

しかし「彼・彼女らは悪意があって聞いてくるわけではない、ただ興味があるだけなんだ」と気付いてからは普通に答えるようにしています。この質問に対する答えは今では持ちネタの一つ、会話のきっかけになる便利なネタになりました。

それでも時々思います、「いつまでこの質問に答えないといけないのだろう？いつまで両親のことを初対面の時から聞かれないといけないのだろう？」と。

私は今まで人に「お父さんはどこの人？お母さんはどこの人？」と聞いたことはありません。それは聞く必要の無いことだからです。大学で会った人には「何県出身？」と聞いたことはありますが、両親のことは聞きませんでした。日本に住んでいたら両親がどこの出身でも同じこと。なぜなら、みんな同じ「日本人」だからです。そういう意識があるから私も初めて会う人に両親の出身地を聞きませんでした。そう考えると、両親のことを聞かれる私は「日本人」と認められていない気がします。

以前どうやったら「日本人」になれるのか？ということを両親ともが日本国籍の人＋「日本人」？）と話したことがあります。その人は「自分が日本人と思えば日本人になれる！」と言っていました。

はたしてそうなのでしょうか？自分がいくら「日本人」だと主張しても、外見や国籍が違うことを理由に「日本人」でないとされてしまう、それが今の日本の現実ではないのでしょうか？もしかしたら、それが世界の現実なのかもしれません。

これからも私は「お母さんかお父さん、どっちが向こうの人？」というような質問に答え続け、そしてそのたびに「いつまで同じ質問に答え続けないとだめなんだ」と思うことでしょう。

二〇〇二年九月十九日

岡村　兵衛

Copyright(C) 2002　Hyoue Okamura　All Rights Reserved.　www.kreuzungsstelle.com